

これは私が学生の時の話です。

私の通う大学は小さいながらも有名な海水浴場がある観光地にありました。それ故に夏には学生達はこぞって海水浴関係のバイトを希望します。理由はただ一つ。女性の水着を合法的に眺める為。悲しい哉、男子学生なんていうのはそういう生き物なのです。

しかし、監視員のバイトに応募した私の前には定員オーバーという壁が高く聳えていました。けれどもペヤングだって言っているのではないですか。夏と言えば水着です。引き下がれません。何かないかと必死に食らいついたところ一つ仕事を紹介して貰えたのです。

おばけ屋敷のおばけ。

浜辺の一角に建てられた簡素なお化け屋敷。これは10年近くも前に町の青年会が海水浴場の活性化を図って造ったものでした。今となっては寂れているものの、始めた当初はなかなかの人気だったそうです。

しかしお化け屋敷。水着とは縁遠い仕事です。けれど先程まで鼻息を荒くして仕事をくれと頭を下げていた手前断ることも出来ず、私はその仕事を引き受けることにしました。

バイト初日。

事務所の扉を開けた時の衝撃を私は今でも忘れません。

けだるそうにパイプ椅子に腰かける子泣き爺。雑誌の袋とじに被りつく猫娘とねずみ男。いや、そのトイレの男性マークのようなガタイは猫息子と言うのが正しいのでしょうか。さらに奥では顔を白とグレーに塗った男が二人居眠りをしていました。それぞれ脇に白とグレーの巨大なかまぼこ板のようなもの。……一反木綿と塗り壁ということなのでしょう。戸惑う私に小柄な老婆……の格好をした学生風の男が近づいてきます。

「今日から？俺らみんなバイトだから楽にしていよいよ」

そう言うとお馴染みの柄のちゃんちゃんこと下駄を差し出します。

「うらやましいよな、髪が長いってだけでこの優遇」

優遇ではないです。水着見放題の監視員に比べれば冷遇にはかなりません。そもそもお化けと妖怪とを混同しているのではないですか。

愚痴りながらも衣装に着替え、言われもしないのに髪で片目を隠していると奥から人間がやってきました。TシャツにGパンという誰よりも人間らしい格好をした人間です。

「今日からか？時間がないな。今日は立ってるだけでいい。ただこれだけは約束して欲し

い。お客様に楽しんでいただく。それを忘れるな。ほら、お前らも！」
妖怪達はハイと大きく返事をして持ち場へと消えて行きました。
これが……人間先輩との初めての出会いでした。

2週間も経つと私もだいぶバイトに慣れてきました。
休憩室で妖怪たちが駄弁っているのもすっかり日常の風景です。
ただその日は少し様子が違いました。私が扉を開けたとたん人間先輩の怒号が聞こえました。その前では子泣き爺がしゅんとしています。
「てめえお客さんを泣かせて帰らせてそんなに誇らしいか？え？」
「でも……俺らおばけですし、怖がらせるのが……」
「違うだろ！怖いのを楽しんでもらうのが俺らだろ！！」
その時の人間先輩は怒っているというよりも悔しいという目をしていました。

それから数日。世間はお盆休みに突入した頃事件が訪れます。それは友人からの1通のメールでした。私の憧れのゼミの先輩が海水浴場に来るといいます。
歩くワイドショーと言われる友人はどこの子が誰と付き合っているとか、誰がいつどこに出かける予定だとか、そういう事に誰よりも精通した男でした。
当然彼は私とその先輩に好意を抱いていることも知っています。私がお化け屋敷のおばけなどというおよそ憧れの女性に見られたくないようなバイトをしていることもです。
そこで気を使って……いや、恩を売ってきたのでしょう。
憧れの先輩というのは容姿端麗、才色兼備、おまけに実家は地元の名士。天が二物も三物も与えてしまった幸せ格差ピラミッドの頂点に位置するような女性でした。
そんな女性に私などが想いを抱いてもどうにもなりやしない。分かってはいてもいい所を見せたいというのが男の性というものです。
万が一先輩がお化け屋敷に来たならば…このゲゲゲスタイルは見せたくない。

私は普段より早めに出勤すると人間先輩にその旨を相談しました。
人間先輩は少し悩むと
「だったら今日だけ俺が持ち場代わってやる」と言ってくれました。
実に意外な答えでした。人間先輩は仕事に関する妥協は許さない人だと思っていたからです。人間先輩は続けました。
「俺はお前のことを買ってるんだ。お前はお化けの素質がある。存在感がないのがいいんだらうな」
喜んでいいのか悪いのか複雑な褒め言葉です。
「お化けってのは怖がらせようとしてるわけじゃない。ただ怖がられてしまうだけなんだ。奴らだってな、本当はただそこに佇んで今のこの様子を眺めていたいただけなんだよ。気に

なるじゃんか」

私は人間先輩に代わって事務所から監視カメラで異常がないかを確認する業務につきました。幾つかあるモニターにはいつもの連中が指さされたり苦笑されたり姿が映し出されています。その中に私はあの人の姿を見つけました。憧れの先輩です。そしてその前に突然現れる人間先輩。凍りついたように表情が固まる憧れの先輩。次の瞬間でした。全てのモニターが砂嵐で包まれました。

何が起きたのかさっぱり分からず右往左往していると事務所の扉が開きました。

「人間先輩！これどうしたら……」

言いかけて止まりました。そこに立っていたのは人間先輩ではなく憧れの先輩だったので。

先輩は私がこんな所にいることに驚くこともなくただこう言いました。

「……ねえ、お父さんはどこ？」

それから人間先輩が事務所に現れることはなくなりました。

憧れの先輩が言うには、人間先輩は自分の父親にそっくりだったというのです。

憧れの先輩のお父さんというのはずっと昔の青年会の会長を務めていたらしく、今のこの海水浴場の活気があるのも、このお化け屋敷の企画を立ち上げたのも全部お父さんだったそうです。

そして、そのお父さんというのは先輩が小学生の頃。もう10年近く前に病気で亡くなっている。

その年の夏休み。私は最後の日迄ちゃんちゃんこを着て過ごしました。

仕事が楽しかったのもあるかもしれませんが、でもそれ以上に、そこにいたかったからです。

ひょっとしたらもう一度くらい人間先輩が顔を出すんじゃないかと。

私はただそこにいてただ眺めていたかったのです。まるで人間先輩みたいに。

【終】

※2010/08/08 C2-Reading vol.09『カイダン』にて栄克夫名義にて発表・公演

※ご利用上の注意※

- ・本作はどなたでも無料にてご利用いただけます。
- ・本作をご利用頂く際は必ず作者（gumba1227@hotmail.com）までご一報頂けますようお願い致します。

- ・但し、練習での使用などの場合はご連絡の必要はございません。
- ・連絡が必要かどうかの基準は以下の通りでございます。

※連絡不要の場合

- ・仲間内で集まっての練習でのご利用。
- ・Skypeなどを介しての第三者の聴取・視聴が出来ない形でのご利用。

※連絡が必要となる場合

- ・各種配信サービスによる配信・生配信など第三者の聴取・視聴が可能な状況下でのご利用。
- ・連絡を要する形でのご利用の際は、必ず作品名・作者名をご記載いただけますようお願い致します。

その他ご不明な点ございましたらお気軽に下記までご連絡下さい。

gumba1227@hotmail.com (岩本)